

中西直樹著

『真宗女性教化雑誌の諸相』

佐々木政文

本書は、浄土真宗本願寺派（西本願寺）教団における、女性による（もしくは女性に対する）教化活動についての基礎的な研究をまとめたものである。第一部「論文」と第二部「雑誌総目次」からなっているが、本書評では主に第一部の内容について紹介する。

第一部「論文」は六本の論文から構成されている。本書の書名は「真宗女性教化雑誌の諸相」であるが、第一部のうち、女性教化雑誌に関する論文は第五章・第六章のみである。第一章～第四章では、女性による（女性に対する）教化活動全般が取り上げられており、その延長上に女性教化雑誌についての考察が位置づけられている。

各章の内容を見ていこう。

第一章「女性教誨師の任用とその実情」では、監獄法（一九〇八年一〇月施行）に

よって男監・女監が区別されたことから、女監での教化を担当する「女教誨師」の養成が本願寺派教団においても行われたが、その成果は全体的に低調であったことが明らかにされる。

第二章「女性教化者「女教士」の任用と養成機関の変遷」では、一九〇九年以降、主に都市住民を対象とする「特殊布教」に必要な教化者を確保するため、在家信者および女性が「教士」「女教士」に任せられたことが明らかにされ、教団による「女教士」養成の過程が述べられる。

第三章「女性僧侶の登場とその背景」では、一九二〇年代に教団内で女性による布教活動の重要性が高まるなかで、「女教士」たちは布教を通じて女性解放を目指すようになったことが指摘される。また、一九三〇～三一年には、仏教婦人会を中心に「女性公民権の獲得運動」が展開され、教団側も不十分なが女性僧侶の存在を認めるに至ったことが明らかにされる。

第四章「本願寺派仏教婦人会」「女子大学設立運動」再考」では、仏教婦人会総裁の大谷籌子（一八八二～一九一一）によって一九〇八年に開始された女子大学設立運動

の経過が明らかにされる。この運動は、一九一四年以降には本願寺派の負債問題が発覚したことにより停滞し、本山も一九一九年に女子大学設置を文部省に申請したものの不認可に終わったという。

第五章「近代真宗『女性教化雑誌』興亡史」では、一八八〇年代後半以降に創刊された仏教系の女性教化雑誌のうち、現在確認できる二〇誌が、その刊行時期によって第一期（欧化全盛期）・第二期（日清戦争後）・第三期（日露戦争前後）・第四期（大正デモクラシー期）の四つに分類され、その基本的な書誌情報が紹介される。

第六章「『婦人雑誌』と関連事業の展開」では、一八九二年三月から一九一九年二月まで毎月刊行された仏教系の女性教化雑誌である『婦人雑誌』（第五号）第三八二号、一八九二年三月～一九一九年二月の総目次となっている。改題前の『婦人雑誌』と関連事業の展開

第二部「雑誌総目次」は、第六章で取り上げられた『婦人雑誌』（第五号）第三八二号、一八九二年三月～一九一九年二月の総目次となっている。改題前の『婦人雑誌』と関連事業の展開

人教会雑誌』（第一号）第五〇号）の総目次は、岩田正美・中西直樹編著『仏教婦人雑誌の創刊（近代日本の仏教ジャーナリズム第二巻）』（法蔵館、二〇一九年）に収録されているため、本書第二部はその続編という位置づけになる。

以上が本書の構成であるが、全体的に、基礎的な情報の整理に終始しているという印象が否めない。本書には全体としての問題提起を行う序章も、検討結果の総括を行う終章もない。論文各章における研究史整理や小括は、ごく簡潔に事実を指摘しただけのものであり、わずかに取り上げられている先行研究も本願寺派教団に関係するものがほとんどである。個別の事象から歴史の大きな変化や構造を論じるにあたって、基礎的な情報の収集・整理が重要であることとはいうまでもないが、そこで得られた知見を歴史の全体像とすり合わせる作業もまた、歴史研究にとって不可欠なものである。

著者は本書において「真宗に限定してではあるが、戦前期における女性教化と関係雑誌の全体像の把握につながることを意識」したというが（「はしがき」ii頁）、把

握されるべきは「女性教化と関係雑誌の全体像」ではなく、女性教化と関係雑誌から浮き彫りになる近代日本のジェンダー構造の全体像ではなかっただろうか。もしも本書においてこの課題が達成されていたならば、たとえ取り上げられる素材が真宗に限定されていたとしても、その事例研究としての価値に疵がつくことはなかっただろう。その意味で、本書の視野が女性教化と関係雑誌にとどまっていることは残念である（ただし、本書第三章第一節では、第一次世界大戦後における女性論の発達にもなっており、教団内でも女性による布教活動の重要性が浮上したことが指摘されており、この点は注目される）。

しかし、評者は決して、本書において明らかにされた事実が無意味だと述べているのではない。本書第一章～第三章において、これまで注目されることがなかった「女教諭師」「女教士」の存在に光を当て、それらの人々の略歴を明らかにした点は、重要な成果であろう。また、第五章において明らかにされた、明治・大正期に創刊された個々の女性教化雑誌の書誌情報は、今後の史料収集において大いに活用されるべ

きである。例えば、前者については政府や自治体による女性教化政策との関連性を、後者についてはキリスト教女性教化雑誌の内容との比較を、それぞれ念頭におきながら分析を進めることで、本書の成果を活用することが考えられるだろう。その意味で、将来の研究に対する手がかりを提供した貴重な書物として、本書を受け止めておきたい。

（たけふさき・まさや 京都先端科学大学人文学部 講師）

（A5判、四四二ページ、六六〇〇円、法蔵館、二〇二二・一二刊）